

2021.10  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみや 富薬

10号

第43巻

No.387



ノダケ *Angelica decursiva* Fr. et Sav. (セリ科 Umbelliferae)

**生薬** ゼンコ（前胡） 秋から冬にかけて根を掘り取り、茎葉、ひげ根を取り除き陽乾する。

**成分** クマリン類 : nodakenin, nodakenetin, umbelliferone, dccursin, decursidin 等。

**効能** 解熱、痰、喘息、吐き気、食欲増進、気管支炎、風邪に煎じて服用する。参蘇飲、荆防敗毒散、蘇子降気湯などの漢方処方に配合される。



生薬 ゼンコ（前胡）

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



日本薬局方は*Peucedanum praeruptorum* Dunnの根（白花ゼンコ）又はノダケの根（紫花ゼンコ）と2種の植物を基原としています。両種ともセリ科植物ですが、属の違う種が同一名の生薬として薬局方に収載されることは滅多にありません。前者は日本に分布しておらず、中国山東、陝西、安徽、江蘇、浙江、福建、広西、湖南、湖北、四川の各省に分布する草丈30–120cmに達する多年草です。葉は2–3回3出羽状複葉で鋸歯を持ちます。秋に集散花序を頂生または腋生し、白く小さな花を多数咲かせます。中国の本草書の基原植物はこの種と考えられています。『名医別録』（502–536）には「前胡、味苦、微寒、無毒。痰満、胸脅中痞、心腹結氣、風頭痛を療し主る。痰実を去る。氣を下し、傷寒寒熱を治す。陳を推し新を致し、目を明らかにし精を益す。二月、八月に根を採り、曝乾す」と、陶弘景（456–536）は「近道いづれにもあって、下湿の地に生ずるものだ。呉興（浙江省）に産するものが勝れている」と云っています。詳しくは『図経本草』（1062）に「今は陝西、梁漢（陝西省）、江淮（安徽省）、荊襄（河北省）の諸州郡、及び相州（河南省）、孟州（河南省）いづれもある。春青白色の斜蒿（？）に似た苗を生ずる。生えた初めには白い芽で、長さ三・四寸になる。味は甚だ香美なものだ。また芸蒿（柴胡）にも似ている。七月中に葱（*Allium fistulosum*）の花に類した白い花を開き、八月実を結ぶ。根は青紫色である」と記され、花の色が白色であることや産地から、ほぼ白花ゼンコを指し、真正の前胡と思われる。また李時珍（1518–1593）は「前胡には数種あるが、苗の高さ一・二尺で、色は斜蒿に似て居り、葉が野菊のようで細く痩せ、嫩芽は食料にもなり、秋季に蛇牀子（オカゼリ*Cnidium monnieri*）の花に類した紫白色の花を開き、その根は皮が黒く肉が白く香気のあるものが眞物である。大抵北地の産が勝れたものとなっている。故に方書には北前胡とさえ称するのだ」と言っています。この種は花色が紫白色であることや北地産であることから、中国東北部やウスリー、朝鮮など北部にも自生し、北前胡の名称が与えられていることから紫花前胡、つまりノダケではないかとも考えます。

ノダケは中国東北部や河北、陝西、河南、四川、湖北、安徽、江蘇、浙江、江西、広西、広東、台湾に自生するほか、ウスリー、朝鮮に分布し、日本では本州、四国、九州に自生する草丈80–150cmに達する多年草です。莖は直立し円柱形、葉は1–2回3出羽状で尖った鋸歯があります。秋に集散花序を頂生し、濃紫色の小さな花を多数咲かせます。国内に広く自生することから古くから知られていて、『出雲風土記』（733）には「意宇郡」、「飯石郡」、「大原郡」の「凡て、諸の山野に在る所の草木」に「前胡」が収載され、「ノセリ」の和名が付けられています。後の『本草和名』（918）には「前胡、和名宇多奈、一名乃世利」とあり、平安時代には「ウタナ」、「ノセリ」の名で呼ばれていたことが分かります。『本草綱目啓蒙』（1803）になってようやくコマゼリ、ノゼリ、タニゼリ、ミツバグサ（延喜式）、ウタナ、ウマゼリ、ヤマゼリに続いてノダケ（筑前）の名が出てきます。「向陽の山野に多く生ず。初めて生ずる者は只三葉なる故にミツバグサと云う。長ずるに随い数岐を分かち、大になり、大抵二活の輩に類して同じからず。臺を起こす者は高さ七・八尺、葉互生す。秋に至り、枝端に花を開く。胡蘿蔔（ニンジン*Daucus carota* subsp. *sativus*）の如く、傘をなして簇生す。紫黒色、又は白色なる者あり。一種細葉の前胡あり。和州（大和）に多し。葉細長く、岐多くして当帰葉の如し。花実の形状は異ならず」とノダケの特長と白花種（f. *albiflorum*）が記されています。（村上守一 記）